



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペレストロイカにおけるテレビ・メディア : グラスノスチのメディア論
Author(s)	城野, 充; Johno, Mitsuru
Citation	スラヴ研究, 43, 167-180
Issue Date	1996
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5247
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113406.pdf



ペレストロイカにおけるテレビ・メディア

— グラスノスチのメディア論 —

城野 充

はじめに

1991年8月19日21時29分、ソ連国営テレビのニュース番組「ヴレーミヤ」において、戦車上で仁王立ちし、市民に向かってゼネストを呼びかけるエリツインの姿が放映された。時間にしてわずか41秒の「生けるエリツイン」の映像は、その後のクーデターの帰趨を決したと言っても過言ではない。なす術なく恐怖、絶望の淵に立ちすくんでいたロシア市民はこの映像に希望を見だし、モスクワを中心とした彼らの行動はクーデターの完遂を阻止し、ロシアの革命へとその道を開いたのである⁽¹⁾。

テレビは全ソ連規模で市民＝視聴者に対し、「戦車上の生けるエリツイン」を現前させた。この事実は、ペレストロイカ最大の成果のひとつであるグラスノスチによって開放されたテレビ・メディアのもつ現示性とペレストロイカの関係性を象徴するものである。まさにペレストロイカは、その過程がテレビというメディアに媒介されつづけたという点において、他に類例を見ない変革であったといえよう。別の表現をすれば、ペレストロイカの過程というものは視覚化されたコミュニケーション過程であり、人々はテレビ映像によって視覚化されたペレストロイカをみずからの環境としていった。こうした意味において、グラスノスチの問題はコミュニケーションの観点からの、またメッセージの伝達を媒介するメディア特質の観点からの考察が要求される場所である。

本稿は以上のような観点から、ペレストロイカの時代に支配的なメディアであったテレビに焦点をあて、グラスノスチによるメディアの変容とそれがペレストロイカの進行過程に及ぼした影響を与えたかに関して考察するものである。

1. ペレストロイカの前提としてのコミュニケーション革命

コミュニケーション流通過程と「ソ連的特殊性」

ペレストロイカ以前のソ連のコミュニケーションといえば、一般に共産党によって一元的に統制されたマス・コミュニケーションを中心としたそのシステムが想起される。

事実、レーニンが『なにをなすべきか』で示した集团的扇動者、集团的組織者としての新聞理論によって、1917年以降、ロシアのメディアは全面的に再編され、労働者階級の代表機関＝共産党の統制に服すべき存在となった。しかし、マス・メディアを統制下におくことによってコミュニケーションの一元的管理をはかろうとした党の意図と、実際にそれが実現していたかどうかは別の問題である。つまり、党からメディア・メッセージが確実に受け手である国民に到達していたかどうかである。

ソ連においては、この問題を前にしてきわめてソ連的とでもいうべき困難が立ちわだかかっており、ここではさしあたり次の3点があげられる。それは一つには、みずからの国土の広大さである。2番目には民族的多様性、そして3番目には受け手の教育水準の低さという問題があった。

こうしたマス・コミュニケーション過程におけるソ連的特殊性ゆえに、マス・メディアの一元的統制という点のみで、送り手である党の意図があたかも皮下注射のように、受け手一人ひとりに対し速やかに効果をもつという「皮下注射論モデル hypodermic effects」によってソ連のマス・コミュニケーションの影響を論じることはできない。そもそもナチズム台頭を背景にした仮説である「皮下注射論モデル」は「大衆社会論」に立脚しており、そこではコミュニケーション・シンボルの理解能力に関し受け手の一定の均質性が前提とされていた。

しかし、ソ連においては、そのような前提は存在しておらず、コミュニケーション・シンボルの理解能力が変化することなく、地理、民族、教育水準を横断することは困難であった。地理的広大さ、民族的多様性、そして教育水準の高低、とりわけ識字率の問題は、ロシア革命からスターリンの時代にかけてのロシア・ソ連のコミュニケーションを考えるにあたって看過できない要素である⁽²⁾。ソ連の歴代政治リーダーもこの点には常に最大限の関心をはらっており、政治コミュニケーションにおいて、党からのメッセージの直接的な到達には限界があるとの前提に立脚したシステムづくりが要求されたのは言うまでもない。

周知のように、このような克服すべき点をもつ政治コミュニケーションの流れにおいて、重要な役割を果たしていたのがアジテーター（口頭扇動者）であった。A・インケルスは、このアジテーションといったインターパーソナルなコミュニケーションの組織化こそが、ソ連のコミュニケーション・システムの特徴的なイノベーションであったとする。アジテーションの主たる場所は工場などの職場集会で、そこでのアジテーターの任務は、党のメッセージを十分な情報をもたない職場の同僚にわかりやすく説明することである。このコミュニケーション過程でアジテーターは、メッセージの送り手である党指導部と受け手である大衆との中間に位置し、媒介者としてメッセージを伝達、その流れを整流する。インケルスが言うように、アジテーターが党に期待されたことは、「コミュニケーション・メディアの達しうる範囲を拡大し改良すること」⁽³⁾であり、大衆の意見・態度形成者となることであった。

アメリカのコミュニケーション研究者であるE・ミツケヴィチは、このアジテーターのオピニオン・リーダーとしての性格をとらえ、テレビ以前のソ連におけるマス・コミュニケーションの影響を考えるにあたり、「二段階の流れモデル two-step flow effects」の適用が有効であるとする⁽⁴⁾。このモデルは、「皮下注射論」のように受け手はマス・メディアによって直接に支配されるのではなく、メディア・メッセージはオピニオン・リーダーを介して受容されるというもので、E・カツラによって展開された限定効果論である。

アジテーションはソ連のメディアのカバレッジを拡張した。新聞は輸送事情の問題もあり、広大な国土を十分にカバーできておらず、おまけに用紙不足は恒常的であった。それに加えて、労働者たちは新聞を読もうとしなかった（読めないものもいた）。ラジオへのア

クセスも限られたものでしかなく、そこには中央から伝達されるメディア・メッセージへの直接的、全面的、そして同時的な接触を見いだすことはできない。こうしたなかにあつて、アジテーターはコミュニケーション過程における二段階目に位置し、擬人化されたメディアとして不可欠の存在であり、メッセージが地理や民族、教育水準を横断するための掛け橋となった。同時に、アジテーターは下からの不満や意見を上に吸い上げるという安全弁、フィードバック機能をはたしていた点も指摘する必要がある。

しかし、こうしたマス・コミュニケーションと制度化されたパーソナル・コミュニケーションの併用というソ連型政治コミュニケーションは、それでもなお、受け手の全面的な捕捉の点で問題を残していた。アジテーションはメッセージの到達に関し重要な位置を占めていたが、そのカバレッジは党や労働組合など政治的に定まった構造内部に対してのもので、この構造から外在する膨大な数の個人にはメディア・メッセージの弾丸は到達していなかった。

テレビの出現とコミュニケーション革命

ソ連のコミュニケーション・システムにあつて重要な役割を果たしていたアジテーションというパーソナルなコミュニケーションも、時代とともに、やがてその使命を終えようとしていた。

ここには二つの要因がある。ミツケヴィチによれば、一つには、アジテーションの主要な場であった職場環境の変化があげられる。1967年にソ連では週5日労働制が導入され、工場労働力の不足を解消するため生産の合理化が要請されはじめた職場は、労働時間内のアジテーションを許容しなくなっていった。また、工場内での女子労働者の比重の増大（1981年には51%）も、家事や育児の負担からアフター・ファイヴのアジテーションを困難にさせた⁽⁵⁾。二つめは、テレビの出現とその一般的な普及である。

週5日制が導入された1967年は、ソ連にとりコミュニケーション手段の面でも画期的な年であった。

「モスクワでおこなわれる演説や報告や講演を、モスクワから数百ヴェルスタも、ある条件のもとでは数千ヴェルスタもはなれた共和国内の数百千の地方につたえることのできるような、数百千の受信機をうごかすことも、まったく実現可能である。」⁽⁶⁾

1922年当時のレーニンのラジオに対する上述の期待は、4半世紀後の1967年、ラジオに映像を伴ったテレビとして現実化した。11月2日、通信衛星を利用した「オルビタ・システム」によって、北極、シベリア、極東、さらに中央アジアの約2000万人がモスクワからの番組を直接に視聴可能となったのである。その5日後の11月7日、モスクワは赤の広場で催された革命記念軍事パレードは、エストニアの首都タリンにおいても、日本海に面する軍港ウラジオストークにおいても、同時中継によってその映像がカラー放送された⁽⁷⁾。

さらに、翌1968年1月1日には、以降1991年9月までソ連のメイン・ニュース番組として特別な位置を占めるに至った「ヴレーミャ」が登場、それは数億の発行部数に匹敵する「紙」と「距離」をぬきにした「全国政治新聞」となった。

ソ連の高度に発達した宇宙開発技術によって支えられたテレビの発展は、まさにこの国の従来のコミュニケーション・システムに構造的転換をもたらすことになる。通信衛星を利用したテレビ・ネットワークによりはじめて、党は広大な国土、多様な民族、教育水準を横断、さらには党・労働組合の枠を越えて直接、大衆にメッセージを伝達する可能性を獲得したのである。

視覚メッセージを同時的、かつ均一的に伝達するこのメディアは、アジテーションというパーソナルなメディア（党员による職場の同僚の小さなグループに対する政治情報の伝達）と著しく異なっている。時間と空間を克服し、さらには民族、学歴、そして年齢を横断するテレビというメディアの標準化されたメッセージにより、ソ連における「受け手」の概念は、「職場の同僚」から不特定多数の「マス・オーディエンス」へと変化した。

こうして、職場環境の変化と相まって、テレビ・ネットワークの整備と受信機の普及により、パーソナルなコミュニケーションとしてのアジテーションは、政治メッセージの伝達の面で急速にその影響力を弱めていくことになる。このような意味において、テレビはソ連のコミュニケーション・システムに「革命」をもたらしたのである。

2. ペレストロイカとグラスノスチ

ペレストロイカー「開かれた」改革

「ペレストロイカ」は、あらゆる面で疲弊したソ連社会を「建て直す」ことを目標とした上からの改革であった。もちろん、それまでソ連において改革の試みが存在しなかった訳ではない。しかしながら、いずれの改革も結局は成功をおさめることはなかった。その原因はどこに存在するのであろうか。過去の社会改善のプロセスがことごとく頓挫した原因にゴルバチョフは大きな関心をよせ、その教訓は「過去に始められたプロセス、政治、経済、社会の各分野に関連した改革の試みが、民主主義の拡大と発展によって補強されず、民主主義のメカニズムを通じて勤労者自身、社会全体がこのプロセスへ参加することによって補強されなかったことにある」⁽⁸⁾、と総括する。つまり、ペレストロイカに先行する諸改革の性格は、大衆の参加が民主主義によって保証されていないという意味での、いわば「閉じられた」ものであったといえよう。

これに対して、ペレストロイカは「開かれた」改革と位置づけられよう。ゴルバチョフは、さきほどの理由により、「閉じられた」改革としてペレストロイカを断行しようとは考えていなかった。それゆえ、この改革を共産党官僚の抵抗によって失敗に終わらせない唯一の条件は、ペレストロイカを「開く」ことであった。またそれ以外の道は残されていなかった。

ペレストロイカを「開く」とは、つまるところ、あらゆる人々がペレストロイカに参加できるよう政治を「開く」ことである。そして、政治を「開く」とは民主主義を重視することに他ならず、そのためには情報の公開が不可欠であるのは言うまでもない。

こうした「開かれた」改革としてのペレストロイカは、その解釈者の役割を一握りの政治エリートたるソ連共産党中央委員に限定するのではなく、大衆のイニシャチヴによる自由な解釈、広範な参加を許すものなのである。このとき、ペレストロイカは「メッセージ」

から「テキスト」になる。それは、大衆がそれぞれ自己のコンテキストのなかで「ペレストロイカを読む」ことを意味する。

ゴルバチョフにペレストロイカを「開かせる」ことを可能にしたのは、ソ連社会の変貌であった。一言でいえば、この変貌はテレビの普及によるマス・コミュニケーション環境の変化と「高学歴・都市住民」の台頭である。たとえば、ソ連における高等教育修了者は、1960年に4.2%に過ぎなかったものが1985年には21.3%にまで増加している。また、都市居住者の比率についても、1960年の49.3%から1985年には65.4%へと変化を見せている⁽⁹⁾。

T・ザラフスカヤは、ペレストロイカへの客観的要請は停滞した経済・社会関係における矛盾の存在であるとし、高学歴社会とマス・コミュニケーションの発達を生み出す社会の都市化、およびそのような環境下で生きる市民と行政的・命令的システムの内的矛盾をあげている⁽¹⁰⁾。彼らは、様々な情報に接する機会とそれを処理する能力をもち、上からの一方的なコマンドに矛盾を抱く存在なのであり、権力にただ従順な「ムジーク」（進藤榮一）ではない。

こうした高学歴・都市住民化した大衆こそが、ペレストロイカを「メッセージ」としてではなく、「テキスト」としてみずからのイニチャヴで解釈し、ペレストロイカに参加する存在であり、コミュニケーション革命とともに、ペレストロイカのもう一つの前提であった。

ペレストロイカを「開く」ということを、ゴルバチョフはグラスノスチという政策で実現しようとした。

1986年2月、ソ連共産党第27回大会でゴルバチョフは、「グラスノスチなしには、民主主義、大衆の政治的創造、管理への大衆の参加もありえない」⁽¹¹⁾とし、「改革」を「開いていく」ための手段としてグラスノスチを位置づけた。

以降、グラスノスチという言葉はソ連社会において、マス・メディアを筆頭に広範な場で使用されるようになるが、この過程で、しばしば「言論・出版の自由」と同義的に理解されることもあった。しかし、少なくともその理念においては、グラスノスチを「言論・出版の自由」とイコールで結ぶことはできない。ふたたびゴルバチョフを援用すれば、グラスノスチと「言論の自由」は「互いに密接な関係をもってはいるが、両者は同じ概念ではなく、グラスノスチのそれはより広範」⁽¹²⁾なものなのである。ここでグラスノスチは「言論の自由」の上位概念として位置づけられており、その概念には、政治や社会にかかわる問題についての公の場での自由な意見表明・討論といった「言論の自由」、党や行政機関の情報公開義務（政策決定過程の公開を含む）、権力の行使に対して責任を負う義務、さらには市民の政策提言を傾聴する義務などが含まれている。

このように「言論の自由」とどまらず、グラスノスチはペレストロイカを「開いていく」ためのあらゆる諸方策と理解できよう。ここにおいて通底しているのは、「この国のすべてのことがらに市民が参加するための環境づくり」であり、キーワードは「知る」、「声をあげる」、「参加」である。

そしてこの理念は、1988年6月のソ連共産党第19回協議会で採択された決議「グラスノスチに関して」で、全党的に確認されていった。

グラスノスチと公共圏

「ペレストロイカの保証人」とゴルバチョフが位置づけたグラスノスチによって、どれほど広範に「ペレストロイカの世論」を形成しうるか、ペレストロイカの成功はすべてこの点にかかっていた。ペレストロイカ推進派は共産党内にあって決して多数をしめていた訳ではなく、「世論」によって多数派になる必要があったと言える。それは同時に、「世論」を反映していくことで人々をペレストロイカに参加させ、この改革を「開く」ということでもある。

この「世論」というものを「政治・社会問題に関して、公の場で自由に表明された個人の見解の総体」とするならば、ペレストロイカ以前のソ連社会において、そのようなものが大規模に存在したかどうかは疑わしい。「世論」はそれが形成される「場」と、担い手たる「公衆」が必要とされるからである。

「政治・社会問題について、自立的な市民が対等の関係で、公開の討論を通じて世論を形成する場」を「公共圏」という。18世紀のヨーロッパでは、カフェやサロン、そして新聞といったジャーナリズムが「公共圏」として成立し、そこでの論争などによる社会的な相互作用は「公衆 public」を登場させ、「世論」が形成されてきた。つまり、「公共圏」とは「世論」を「媒介するもの（メディア）」なのである。

このように、「世論」、その形成者としての「公衆」、そして「場（メディア）」としての「公共圏」の関係をみると、「世論」の力でもってペレストロイカを「開く」ためには、「公共圏」の創出が不可欠であったことがわかる。なぜならば、ペレストロイカの開始にあたって、ソ連においては未だ、この「公共圏」は必要とされる規模において存在していなかったからである。

勿論、当時のソ連には1000万部の発行部数をもった『プラウダ』に代表される新聞や人口の96%をカバーする国営テレビなどのマス・メディアが広範に存在していた。しかし、問題はそれらが上に述べたような「場」であったかどうかである。「党のメッセージ伝達」を第一義とするソ連のメディアにこの「場」を見いだすことは困難であろう。

それゆえに、ペレストロイカを「開く」ことの第一歩は、党によって独占された、「閉ざされた空間」としてのマス・メディアを「開いていく」ことから始められねばならなかった。グラスノスチとは決して単なる「報知すること」ではない。それは、「参加」と「討論」を保証する「ペレストロイカ公共圏」を創出し、拡大していくことをも意味している。

1986年、ゴルバチョフは二つの週刊紙・誌に新たな編集長を、そしてソ連国家テレビ・ラジオ委員会に新議長を任命することにより、「ペレストロイカ公共圏」創出に向け、その歩をすすめた。

3. ペレストロイカとマス・メディア

活字メディアにおけるグラスノスチ

ペレストロイカとグラスノスチに決定的な影響を与えたのは、未曾有の大放射能事故となった1986年4月26日のチェルノブイリ原発事故である。この大事件の原因とその後の処理は、この国の「システムの根本的な欠陥」を、全世界に対して白日のもとに曝すこと

となった。ゴルバチョフにとり、もはや躊躇は許されなかった。これを機に、彼はペレストロイカの成功を保証する「公共圏」創出のグラスノスチへと踏み出す決意を固める。

この年の秋、新たな編集長を迎えたのは、週刊紙『モスクワ・ニュース』と週刊誌『アガニョーク』であった。前者はE・ヤコヴレフを、後者はV・コロチッチを頭にいただき、以後、「ペレストロイカの旗手」として活字メディアにおけるグラスノスチを領導していくことになる。

これらのメディアが最初に取りあげたのは、過去の歴史の問題、とりわけ「スターリンの時代」であった。なぜなら、ペレストロイカを必要としたソ連の基本的な政治・経済システムはこの時代に形成されたからである。

この問題でまず、『モスクワ・ニュース』が口火を切った。1986年11月9日号に掲載された歴史学者E・アンバルツォフの論文は、ペレストロイカと民主主義の文脈で、「スターリンの時代」と「ブレジネフの時代」を批判した。ここで彼は、1930年代からのスターリン時代の工業化と集団化に際して形成された社会の命令システムは、戦後その実効性を喪失したにもかかわらず、私利私欲に走る官僚によって温存・利用され、社会に停滞をもたらしているとし、民主主義の拡大によるこのシステムの放棄にこそペレストロイカの革命性があると展開した。この論文がきっかけとなり、紙面のみならず、公開講座などで、歴史学者を中心とした論争が展開されていくことになる⁽¹³⁾。

ここで指摘したいのは、『モスクワ・ニュース』などの活字メディアが学者を中心とした知識人たちの論壇・討論の場となり、まさに「ペレストロイカ公共圏」が形成されていった点である。新聞が「党のメッセージ伝達」を最優先の使命とするメディアであることをやめ、人々が「声をあげる」ことのできる場（メディア）となったとき、この新聞というメディアは「開かれた」メディアとなり、世論を媒介する「ペレストロイカ公共圏」が誕生した。

活字（文字）というメディアに媒介されたこの「公共圏」は、そのメディアのもつ特性ゆえに、「論理的」「熟考型」の性格をもっていたことも言及する必要がある。活字メディアはその記号の意味の点で、受け手に対し一義的な意味を伝える。そして、接触形態においては「個人的」な接触を要求し（これに対し、テレビなどの映像メディアは「集団的」）、時間に制約されないという点において（映像は瞬間において消えていく）、受け手に熟考の余裕を許容する。これらのことは、初期のペレストロイカにとり重要であった。なぜなら、「ペレストロイカ」という言葉はただそれだけでは「建て直し」を意味するありふれたロシア語にすぎず、ペレストロイカされるべきものを、言語的な概念で意味を限定して提示する必要があったからである。

しかしながら、この「公共圏」は開放性、規模の点で不十分であった。まず、参加者が学者や知識人に限られていた点があげられよう。二番目として、これらの活字メディアはモスクワやレニングラードなど、ごく限られた地域以外は入手が困難であった点で小規模なものであった⁽¹⁴⁾。

ペレストロイカはより大きな「公共圏」を必要とした。そのために要求されたのは、時空間の克服と全階層的なオーディエンスであった。

テレビ・メディアとグラスノスチー「12階」の場合

ペレストロイカは急がねばならなかった。ペレストロイカは、また、同時的かつ広範な世論によって支えられねばならなかった。「赤軍が自分たちの村にやって来てはじめてロシアに革命政権が誕生したことを知った」というロシア革命当時の逸話があるが、21世紀まで残すところ10余年となったペレストロイカの時代は、もはやそのような悠長な時代ではない。ペレストロイカの直接的、同時的、全地域的、全民族的、全階層的な伝達は不可欠なことであった。この役割を担ったのは、いうまでもなくテレビである。ペレストロイカの前提としての、テレビ・ネットワークの整備（1960年代末～70年代）によるコミュニケーション革命は、ここにおいてきわめて重要な意義をもってくる。

ペレストロイカが知識人の枠を越えて、より広範な世論を獲得するには、「わかりやすさ」が要求されることはいうまでもない。この「わかりやすさ」は、「ペレストロイカ」、「民主主義」、「グラスノスチ」といったシンボルの「人々の心情の世界への訴求力」の度合いに比例する。テレビ・メディアはこの点に関し、「現実の再現性」、「臨場性」、「同時性」の面で受け手に情緒的な感情を喚起することが活字メディアと比べて容易であり、これら三つの特質は、とりわけそれが生放送である場合に発揮される。

ペレストロイカの時代を迎え、ソ連もようやく「何を伝えるか」の問題から、「いかに伝えられるか」の問題に、つまりメッセージの伝達に際しての「メディア」選択の問題が自覚されはじめた。その時、テレビにおけるグラスノスチは「生放送番組」の増加となってあらわれた⁽¹⁵⁾。そして、人々に生放送によるテレビの社会力を実感させたのが、国営中央テレビ・青少年番組制作局による社会・情報系の討論番組「12階 Двенадцатый Этаж」（1986年1月、放送開始。87～89年に人気を博した）である。

討論の主役はティーン・エイジャーで、その相手は大人ということとあわせ、主役たちはスタジオにセットされた「階段」に座るという定型をこの番組はもっていた。「階段」は、彼らの日常における「場」を意味している。実際、アパートの階段・踊り場は、学校のひけたあと彼らが集う「たまり場」であった。つまり、スタジオの「階段」は若者たちの「場」を象徴しているのであり、それによって製作者は彼らの本音を引き出そうと意図したといえる。

この番組は次の点で画期的であった。すでに述べたように、まずこれが生放送であったことがあげられる。生放送による「12階」はそれまでソ連のテレビにおいて「ノイズ」とされカットされてきたものを、あますことなく映し出したのである。それまでソ連において生放送は著しく制限されており、この意味で、この国のテレビは生放送という方法によって発揮されうる、最もテレビ的な特質が封殺されていたといえよう。

怒りをあらわにした若者の顔、彼らの研ぎすまされた意見に狼狽する大人の顔。テレビにおける「正統的」な少年・少女の顔であったピオネールたちにとって代わったのは、パンクファッションの職業専門学校生といったノン・エリート若者たちであり、彼らが、そしてその「声」が、肯定的なものとして公の場に登場することは従来なかったことである。

生放送は、このノン・エリートたちの社会体制に対する「怒り」を「表情」や「ふるまい」、さらには「ファッション」などの「身体の記号性」でもって、全国の視聴者に現前さ

せていった。そしてこのとき、「ペレストロイカ」というシンボルは映像の形で視覚化され、これによってペレストロイカは「論理の世界」から「心情の世界」へと、その理解される場が移行しはじめる。

第二に、テレビ画面をはさんだ「コミュニケーションの変化」が重要である。そこにみられたのは、ゲスト＝共産主義の指令者、参加者・視聴者＝指令される者、といった図式ではなく、対等の立場で社会の問題を語り合うスタイルであった。従来、この国の公の領域で支配していたものはコマンドとしてのコミュニケーションであり、「12階」のコミュニケーションは、「垂直的」なものから「水平的」なものへの変化を示すところとなった。

最後の点は、新たな「公共圏」の創出である。活字メディアとしての『モスクワ・ニュース』などが創出した「ペレストロイカ公共圏」は、いわば「知識人の公共圏」であり、その開放性と規模の点で十分でなかったことはすでに指摘した通りであるが、「場」としての「12階」は、その点において前者を凌駕していた。それはひとつには、テレビそのものもつつ開放性に帰すことができる。さらには、「12階」での討論のテーマがより日常のレベルに設定されていたからである。加えて、ソ連の各都市をテレビ・ブリッジで結ぶというスタイルは、テレビ空間としての大規模な「広場」をつくりだした。

このように、「12階」はテレビにおけるグラスノスチの幕を切って落とした。テレビというメディアのその特質の開放は、テレビ・メディアによって媒介される「ノン・エリートの若者」、彼らの「髪形」、「ことば」など、様々なメディア（記号）に「声」をあげさせていくことになる。

テレビ政治としてのペレストロイカ

ロシア革命が新聞とアジテーションというメディアによって遂行された革命と特徴づけるならば、ペレストロイカは、開放性、情報拡散性、明瞭性において、テレビ・メディアに媒介されて進行していった革命と表現できよう。

1989年、ソ連は議会制民主主義にむけて新たな一步を踏み出すことになる。3月初めの複数候補制による選挙をうけ、5月には第1回ソ連人民代議員大会がクレムリン宮殿で開催されるに至るが、特筆すべきは、議会にテレビカメラが入り、ソ連史上はじめてその模様が完全生中継されたことである。このとき、ソ連のテレビには政治に対する監視機能が働きはじめたといえる。そしてこれによって、国民の政治リーダーに対する関係が、「監視される関係から監視する関係」へと、転換した。「ソ連人民代議員大会の期間中、生中継の結果として、この国は総生産量の20%を失った。」⁽¹⁶⁾ というルキヤノフ最高会議副議長の発言は、人々のこの生中継に対する熱狂ぶりを雄弁に物語っている。

テレビ・メディアによるグラスノスチは、活字メディアによる議事録的監視とは、その特質において本質的に異なる。テレビは代議員たちの発言内容にとどまらず、彼らのたち振るまいや議場の雰囲気にも、その対象が拡大する。第1回ロシア共和国人民代議員大会の開催期間中（1990年6月）に実施された世論調査結果にも、生中継によって開放されたテレビのメディア特質に対する視聴者の共鳴が如実に示されている。

第1回ロシア共和国人民代議員大会（1990.6）に関する
モスクワ市民の情報源

情報源	割合 (%)
中央テレビ	70
新聞	52
モスクワテレビ	36
同僚、友人、知人	23
ラジオ（マヤーク）	22
レニングラードテレビ	21
ラジオ（第1チャンネル）	16
外国のラジオ	8
その他	1

Гостелерадио, Аудитория, 13, М., 1990

ここにあげた表からわかるように、大会に関する情報源の第1位は中央テレビが占め（70%）、2位の新聞（52%）をうまわまっている。さらにこの調査結果によれば、テレビによる情報の選択理由として人々は「視覚的印象の重視」をあげている⁽¹⁷⁾。「視覚的印象の重視」が「身体の記号性」の復権につながっていくのである。

テレビによって媒介されたペレストロイカにとり、ここにおいても、「何を伝えるか」の問題以上に、「いかに伝えられるか」が重要となっていた。

ペレストロイカの「広場」

テレビがつくりだした最大の「ペレストロイカの公共圏」は、これまた中央テレビ青少年番組制作局による深夜の社会・情報系番組「視線 Взгляд」（スタートは1987年10月）である。中央テレビのレイティングにおいてつねに上位を占めつづけたこの番組の国民的人気は、徹底的に「型破り」であった点に求めることができる。

セーターにジーンズという「いでたち」の、それまで全くの素人であった番組の青年キャスターたちは、ビデオ・クリップやインタビュー、スタジオでの討論など、不定型なスタイルでソ連社会を告発していった。この「不定型」こそがこの番組の最大の特徴で、視聴者はそれゆえに、自宅という自己の空間で、自己のコンテクストにひきつけてその番組進行に参加していったのである。

「視線」を語る時忘れることのできないのが、番組の合間に流されるハード・ロックである。ここではハード・ロックもまた、若者たちの社会に対する「怒り」を表現するメディアとなっている。この番組にとって「幸福な家族」や「順風満帆な人生」は関心事ではなく、スターリン圧制下で辛酸をなめた人々、貧困な福祉行政のもとに生きる障害者や孤児、麻薬中毒者といった、それまで語られることがタブーであった社会的弱者に典型的にみられる「社会主義のひずみ」こそが、一貫したテーマであった。ここでもまた、ペレストロイカは「怒り」「嘆き」という映像によって視覚化されている。

取り上げるテーマの大胆さに加えて、「視線」の特徴のひとつに、視聴者とのコミュニケーションの双方向性が指摘できる。キャスターたちの前のテーブルに置かれた電話がその象

徴であり、投書だけでなく電話という手段で、生放送中のフィードバックが展開された。また、視聴者はスタジオでトーク・ショウの主演でもあった。

「12階」が切りひらいた水平的なコミュニケーションをより強固なものとし、さらには視聴者との双方向的なコミュニケーションを展開した「視線」という「場」で、やがて人々はそれぞれ独自にペレストロイカを解釈しはじめる。そして、それは「政府主導のペレストロイカ」を乗り越えようとする政治集会的な色彩を帯びた巨大な「広場」へと発展し、そこでのペレストロイカはあらゆるものを横断して、ソ連中にペレストロイカを映像というかたちで現前させていった。

こうした「場」において映しだされたペレストロイカとは、人々の旧体制に対する「怒り」、さらには人々が自由に政治を解釈しはじめるや倒れはじめた共産党という、巨大な怪物の悲痛な叫びそのものであった。それはまた、テレビ・メディアは共産党の権威の「脱神話化」過程をイメージ（映像）によって現前させていったとも表現でき、このイメージの同時的・直接的・全地域的伝達こそが、ソ連邦の崩壊を加速化させたといえよう。

むすびにかえて

1991年8月のクーデター事件、12月のソ連邦の崩壊によって「ペレストロイカの時代」は終焉した。グラスノスチによって創出されたテレビ空間という場における「ペレストロイカの公共圏」は、「アンチ・コミュニズム」による結合という「負のコミュニケーション」が支配するものであったが、クーデター事件直後のモスクワ市民たちのゼルジンスキー（KGBの前身であるチェーカーの初代議長）の銅像破壊は、この「負のコミュニケーション」が頂点に達した象徴的なできごとであろう。

「ペレストロイカの時代」の終焉は、同時にまた、このコミュニケーションによって成立していた、テレビにおける「ペレストロイカの公共圏」の終焉でもあった。ペレストロイカとそれ以後のテレビを含めたマス・メディア環境の変化は、コミュニケーションの面での「ANTI-」型（負のコミュニケーション）から「PRO-」型（正のコミュニケーション）への転換である。

ロシアをはじめ旧ソ連構成国において、いま求められているのは後者のコミュニケーションであることは言うまでもない。しかし、テレビでの「正のコミュニケーション」による「負のコミュニケーション」の排除は、政治コミュニケーション領域から市民の参加を遠ざけてしまう。ペレストロイカ以後のロシアのテレビ・メディアが直面している問題は、この点にある。

— 注 —

- 1 この「生けるエリツィン」の映像が与えた影響については、次の証言がある。
“Стенограмма собрания трудового коллектива всесоюзной телерадиовещательной компании,” *Экспресс-Информация Бюллетня Иновещания*, выпуск 4, М., 1991.
- 2 このあたりの理解には、袴田茂樹氏の次の論文が参考になる。
「スターリン体制とドイツ・ファシズム体制」『ロシアのジレンマ』筑摩書房、1993年。

- 3 A・インケルス (辻村明訳) 『ソヴェートの世論』 東京創元新社、1955年、112頁。
- 4 Mickiewicz, E., *Split Signals*, Oxford, 1988, pp. 183-193.
- 5 Ibid., p. 186
- 6 邦訳『レーニン全集』第33巻、大月書店、373頁。
- 7 Глейзер, М., *Радио и телевидение в СССР*, М., 1989, стр. 55.
- 8 Горбачев, М., *Избранные речи и статьи*, М., 1988, стр. 304.
- 9 進藤榮一『ポスト・ペレストロイカの世界像』ちくまライブラリー、1992年、87-88頁にあげられたデータによる。原典は、United Nations, *Demographic Yearbook*, New York, 1970, 1989. UNESCO, *Statistical Yearbook*, Paris, 1965, 1987.
- 10 Заславская, Т., *Перестройка и социализм: Постижение*, М., 1989, стр. 224-226.
- 11 *27-й съезд Коммунистической партии Советского Союза*. Стенографический отчет, т. 1, Политиздат, 1986, стр. 83.
- 12 *Известия*, 1988. 5. 23.
- 13 この論争の進展については、和田春樹「歴史の真実を求めて」和田春樹編『ペレストロイカを読む』御茶の水書房、1987年、26-29頁、を参照のこと。
- 14 筆者は1988年末に、日本で予約購読していた『モスクワ・ニュース』のコピーを携えて、ロシア南部の100万都市のロストフ・ナ・ドヌーの知人を訪ねたが、工場技師として働く彼が実際にこの人気週刊紙にふれたのは、この時が初めてであった。こうした事実からして、この「ペレストロイカ公共圏」は少なくとも空間的な意味において、全ソ連的なものではなかったと考えられる。
- 15 NHK取材班『かくして革命は国境を越えた』日本放送出版協会、1990年、226頁。同書によれば、テレビにおけるグラスノスチの展開は87年に入って加速化し、この年、生番組だけで新たに12の番組が登場した。
- 16 *Известия*, 1989. 6. 27.
- 17 Петрова, А., Сапронова, Е., “Съезды и сессии глазами московской телеаудитории,” *Аудитория*, No. 13, М., 1990, стр. 37

Советское телевидение во время “перестройки”

— анализ “гласности” с точки зрения медиа-исследования —

Мицуру ДЗЁНО

Цель данной работы — исследование того, как гласность изменила советские средства массовой информации, особенно телевидение, и как советское телевидение повлияло на ход “перестройки”.

“Перестройка”, вызванная появлением на политической арене М. С. Горбачева, оказала огромное влияние на советское общество и весь мир. Извлекая урок из неудач предыдущих реформ в деле преобразования советского общества, Горбачев придавал большое значение демократии и гласности, с чем чтобы дать этой реформе открытый характер. Его целью было обеспечить “перестройке” широкую общественную поддержку. При этом, главная задача состояла в том, чтобы создать “публичную сферу (the public sphere)”.

“Публичная сфера” предполагает наличие свободного средства массовой информации, в котором она формируется через свободные споры и дебаты, а гласность играет роль в создании такой среды. Именно в этом же смысле Горбачев говорил, что “перестройка” без демократии и гласности обречена на провал.

При исследовании взаимоотношения между гласностью и средствами массовой информации, необходимо прежде всего обратить внимание на коммуникационную революцию как предпосылку “перестройки”. Благодаря этой революции, т. е. созданию всесоюзной телевизионной сети на основе спутника связи в конце 60-х годов, руководство партии получило возможность обращаться непосредственно к каждому индивидууму, что раньше было невозможно. И тогда, впервые после октябрьской революции, осуществилась возможность непосредственного политического общения с каждым на всей территории страны независимо от национальной или профессиональной принадлежности и уровня образования. Таким образом, перед началом “перестройки” уже были готовы условия для формирования “публичной сферы”, и потому Горбачев максимально использовал телевидение для осуществления своей политики.

В отличие от газет и журналов, которые развивали гласность в начале “перестройки” и формировали “публичную сферу” в среде интеллигенции (напр. *Московские Новости*, *Огонек*), телевидение было способно охватывать гораздо более широкие массы людей. И “перестройка” потребовала именно такого масштаба работы.

Путь к массовой поддержке “перестройки” открыла телевизионная программа

“Двенадцатый Этаж”. Гласность на советском телевидении начиналась с этой программы. Самая главная ее заслуга по отношению к “перестройке” состояла в том, что неотобранные заранее, самые обыкновенные представители молодежи выступали в этом телевизионном эфире. Это было удивительным зрелищем для телезрителей, и ее прямой эфир создавал эффект присутствия, вызывая у зрителей чувство причастности к происходящему. Так, телевидению удавалось создавать образ (image) “перестройки”, “демократии”, и “гласности” через эмоции и чувства людей. Таким образом, “перестройка” представала перед зрителями более наглядно.

Гласность выявила специфику телевидения, которая подавлялась в Советском Союзе. Типичной особенностью этого средства общения является прямой эфир, что позволяет самим зрителям участвовать в ходе программы. И, наконец, телевизионная камера была поставлена в парламенте. В этот момент советское телевидение начало осуществлять свою роль наблюдателя за политическим процессом, что обеспечивает зрителям возможность своими глазами наблюдать ход “перестройки”. Причем, нужно заметить, что телевизионная камера сорвала маску с политических руководителей и уничтожила миф о КПСС. Таким образом, люди понимали и чувствовали “перестройку” при помощи передаваемого по телевидению изображения.

Другая программа, “Взгляд”, обладала наибольшей аудиторией. “Взгляд”, как и “Двенадцатый Этаж” передававшийся также в прямом эфире, не имел никакого определенного сложившегося стиля передачи. То есть, эта программа была “холодным средством общения”, по выражению М.Маклюэном. Находясь в своем доме, зрители участвовали в политическом митинге, проведенном на этой телевизионной “площади”. Благодаря отсутствию стилевых рамок, начинают изображать “перестройку” каждый по-своему. Поэтому понятие “перестройка” начало утрачивать единый смысл. Телевидению приходилось выражать все многообразие символов “перестройки”, чтобы обеспечить каждому зрителю возможность сформировать свой собственный “взгляд” на “перестройку”.